

明知大学教員との懇談・江華島干潟センター 延世大学・ソウル市内諸施設

岩手大学人文社会科学部教授
家井美千子

出張調査の概要

メンバー：牧 陽之助 家井美千子 小島聰子（以上、人文社会科学部）

訪問先等：明知大学教員との懇談、江華島干潟センター、延世大学、ソウル市内諸施設（ナンジド、チョンゲチョン）

日 程

12月7日 盛岡ー仙台出発、仁川空港到着

12月8日

明知大教員／吳教授・斎藤教授と韓国の大
学教育事情について懇談（家井・小島）

12月9日

ソウル市中心部に復元された清溪川（チヨ
ンゲチョン）等見学

12月10日

江華島訪問、干潟センター見学（吳教授の
案内による）

12月11日

延世大学訪問、朴教授の案内で、予防医学
院で Dr. SHIN と面談、また東西問題研究院
を訪問し、金教授に面会。

朴教授に延世大学の ESD 事情、現在作成中
の教科書等についての説明を受ける。

「延世 ECO フォーラム」に関し、Dr. SUNG か
らの簡単な説明。

12月12日

延世大学日本語通訳学生の案内で、ソウル
市内のかつてのゴミ廃棄場で現在は市民公
園になった蘭芝島（ナンジド）見学。

見学の後、案内の学生（姜さん）に、学生
の側から見た環境教育や ESD について聞く。

延世大学内の施設等の見学。

「延世 ECO フォーラム」に関し、Dr. SUNG か
ら、あらためてより詳細な説明を受ける。
終了後、懇親夕食会。

12月13日 仁川空港出発、仙台空港着。

仙台ー盛岡に帰還。

報告内容

1. 明知大の吳教授・斎藤教授との懇談により 得られた知見(12月8日)

・現政権の PCSD (Presidential Commission on Sustainable Development)は、非常に多数設置された大統領委員会の一つであって、全く知られていないし、活動しているかどうかともよく分からぬものである。また、教育を担当する「教育部」(文部科学省にあたる)とも無関係なので、この委員会で何か動きがあったとしても、教育政策には何も影響しないであろう。(韓国行政の縦割りぶりは、日本を上回るところがある。)

・一般に、韓国の大学では教養科目としての環境科目が基本的に普及しているが、ESDという概念は知られていない。当然、大学全体で ESD を進める、という動きはあまり考えられない。

・個々の大学が周辺の地域の環境改善に協力する、ということはかなり見受けられる。明知大でも、龍仁キャンパスで、工学部の一部が近くの川を清流化する試みに加わっているはずである。

・ソウル市民の環境意識は高くなっています、行政も環境保全や回復につとめてきています。

ソウル市の環境対策で代表的なものは清渓川(チョンゲチョン)の復活(昨年)があるが、その他にも市内の汚染された溜め池の浄化や、ゴミ処理場跡の公園化などがある。

また市民運動も盛んで、川の浄化、ダム問題などについて多くの運動が行われている。環境問題への関心が高いことは環境を取り上げたTVドキュメンタリー(韓国MBCで放送したもの)の視聴率が高かったことなどからも明らかである。ただし、一般的市民の環境意識は、大気汚染と食糧問題(ソウル市民が食べているキムチのほとんどが中国産であることなど)に関心が集中している程度だと思われる。

ソウルの空気が悪いと皆感じていても、車をなくそう(少なくしよう、あるいは化石燃料からの脱却)などということは全く考えられていない。

このほかに話題になることが多いのは、黄砂・アレルギー問題・シックハウス症候群(韓国語で「新しい家庭症候群」と表現)などである。

地域でのボランティア活動は、小学校から高校まで、常に奨励されている。(補足:後日、現役学生である姜さんに確認したところ、高校では少なくとも3年間で30時間ボランティアを行っていることが要求される。これは「社会教育」としてカウントされる。また、より良い大学に合格したい場合は、もっと多くの時間を費やす必要がある、とのこと)

- 大学では、「農活」と呼ばれている学生の自主的活動の伝統がある。これは、学生がグループで地方の農家のもとに行って手伝

うというもので、以前から(吳教授が学生であった頃から)行われてきたもの。

起源的には朴軍事政権への対抗として、都市ではなく地方で政治を語り合う仲間作り、という面が強かった。(補足:学生・姜さんによれば、参加する学生は現在少なくなっているとのこと。政治的な面が嫌われているらしい。)

- 異文化理解教育に関しては、これを大学の教育に取り入れているところは少ない。韓国で「異文化理解教育」と言われる場合、多くは韓国外の出身の労働者への韓国語教育の場においてである。ほとんどは、中国人労働者にどのようにして韓国語を教えるか(韓化教育)を念頭にして使用する語になっている。

一方で、韓国において英語教育は必須のものとなりつつあり、明知大でもTOEIC500点(この数値は確認の必要あり)以上が卒業要件となっている。(子供に英語を身につけさせるために、母親と子供だけU.S.A.西海岸へ移住させる、ということも流行している。)

英語教育の他に、最近は中国語への興味も増大中で、子供の教育のために小学生のうちに中国へ3~4週間語学留学をさせる、といったことも見受けられる。

日本で言う「異文化理解」的教育は、例えば帰国子女向けの教育の場などでは行われているかもしれない。

また、KOICA(日本でのJAICA/国際協力事業団/にあたる組織)などの事業内容を調査した方が良いかもしれない。それほど、一般には知られていない。

その他：

現在、韓国は激しい変化の途上にあるので、現状のままどれほど継続するのかは予測不能である。かつてはやされた386世代(1990年代に30代・1980年代に学生運動に参加・1960年代に出生した)のはなばなしの活躍は、彼らが支えた盧武鉉政権への失望とともに終わり、彼らは上層と下層に分裂した、と考えられている。

しかも、現在自らを下層と見なす人は70～80%ほどいるが、これは「月収500万ウォン以下は下層民」(注：現在の為替レート100W//約13円)という基準からきている。つまりは「相対的貧困観」だ、と言われている。価値観が大きく流動しているのである。

これまで健在だと言われていた儒教的な価値観も無くなりつつあり、今後何があらわれるのか、先行きはよく分からない状況である。

2. 江華干潟センター訪問（12月10日）

・施設概要

所在：江華島(韓国西海岸北部に位置するソウルから最も近い島)の西南部 仁川市ソウルから自家用車で2時間弱必要。島内では日本語は全く通じない。おそらく英語でもコミュニケーションが難しいと思われる。

通訳者を必ず求めること。

webサイト(ハングルのみ)

<http://www.tidalflatcenter.go.kr/>

江華島のサイト(日本語準備中)

<http://www.ganghwa.incheon.kr>

総面積 704m²(B1,1F,2F)

開館 09:00～18:00

施設の目的 干潟環境の体験教育施設

展示内容

1F 江華島干潟全体の環境を把握できる干潟全体のミニチュア展示、関連書籍やインターネットブース、四季による干潟の変化状況

2F 干潟に住む動植物 動物植物の各標本野鳥等観測のための望遠鏡設置

多目的ビデオライブラリー



干潟センター外観

・見学の概要

施設内展示をすべて見学し、2Fビデオライブラリーで本センターを紹介するビデオ、江華島干潟の環境全般について説明するビデオを見た。

また、当日駐在していたボランティア教育スタッフの女性(ハンさん)から、本センターの設置や運営状況について説明を受けた。彼女の説明によれば、本センターは複数の市民グループの協同により設置・運営されているとのことだったが、それぞれの団体間の連携はあまりうまく行っているとは言えない。特に、地元代表者には漁業関係者もあり、「環境を守れ、野鳥の生息地保護」に対して、生活の基礎である漁業権を守りたいとの考えもあるなど、それぞれの利害が対立することも多いらしい。(漁は、特定の地域で許可している。) 説明者は、特

に絶滅危惧種であるサギの保護を強調しており、基本的に「貴重な野鳥を保護したい」ということを主目的にしていると思われる。本センターは、基本的には小学生などに干潟の重要性を理解させるための教育施設であるため、2Fにも訪れた子供たちの作成した鳥の絵などの展示があった。研究者との連携などがあるのか聞いたが、「研究者がやってくるのを拒むものではない」程度。展示資料の作成などに研究者が加わっているが、運営には関わっていないらしい。



観測室から（右端は呉教授）

センター見学後、建物から下においてすっかり潮の引いた干潟に立ってみたが、視野が及ぶ限り干潟が続いており、大変広大な干潟であることが実感された。この場所は、子供たちを連れてきて、体験学習をさせる場所であるとのことであった。



干潟に映る夕陽



日没後、水が引いた跡

3. ソウル市内の各施設等見学

- ・清渓川（チョンゲチョン 12月9日、11日）
ソウル市での宿舎がこの川に近かったため、周囲を通るとともに何度か訪れる事ができた。最初は日中にかなり詳しく見学しそれで終えようと考えていたが、その後面会した延世大・朴教授の「あの川は夜に訪れるべきです」との示唆でその晩出向いたところ、川の至る所にライトアップが施され、これを見るため観光客はもとより住民で訪れている人も多く、ソウル市民の清渓川への親しみ方を知ることができた。

（清渓川の復元その他に関しては、以下のサイトに詳しい。）

<http://japanese.seoul.go.kr/cheonggye/>



日中の清渓川

川の周囲の至る所にモニュメント等があり、そこにも記されているが、2003年7月から、ソウルの中心部の清渓川を覆って造られた高架の高速道路を取り壊し、人目から隠されていた川を復元する大工事が始まって2005年11月に終了して以来、ソウル市民の憩いの場となった場所である。この大工事は、都市の環境の改善と歴史の復元を目指したもので、李明博前ソウル市長が行った一連の市政改革の象徴的な存在でもある。川の護岸壁には、李王朝時代の王の行列絵図が、数十メートルにわたってタイルで描かれている。ほかにも、かつての石橋ができるだけ残すなど、さまざまな工夫がなされている。



清渓川の壁画

また夜には上述の通り各所にライトアップが施され、さらに時節柄加わったクリスマス(あるいは年末)イルミネーションの電飾も加わり、非常に派手な夜景を演出していた。川底からの光もあり、日中は見つけられなかった小魚の群れ(ボラの類いか?)を、光の中に発見することができたが、護岸がきちんとされ川底にも石が敷き詰められているように見えるこの川に、石の隙間から生えている草以外に生物が生きてい



ライトアップされた清渓川

けるようには見えなかった。ともあれ、「川の復元」などの際に日本人の考えうこととはかなり異なる考え方をここに見ることができる。

・蘭芝島(ナンジド) ゴミ処理場跡の公園
(ミレニアム公園 12月12日)

延世大学・朴教授の助言により、同大学から比較的近い地域にあるワールドカップスタジアムに隣接するミレニアム公園を見学した。この見学にあたっては、通訳もお願いした延世大4年(新聞情報学部)の姜さんという女性にガイドをしていただいた。姜さんは、事前にこの施設全体について調査をするなどの準備を整えていてくれたため、効率的に概要を知ることができた。(この公園の成立等に関しては、以下のサイトで概要を知ることができる。

http://www.clair.or.jp/j/forum/forum/jimusyo/151S_EOUL/INDEX.HTM

<http://japan.mapo.go.kr/index.htm1>

この公園は一般に「蘭芝島(ナンジド)」と呼ばれているらしい。蘭芝島は漢江に面し、1960年代初頭までは蘭と靈芝が生息する美しい島であったというが、70年代の経済成

長以降、高さ 100m、長さ 2km の巨大なゴミの投棄場所となってしまった。ゴミの悪臭は漢江対岸にまで漂ったそうで、いわばこの場所は見捨てられた土地であった。

しかし、1998年7月に、当時の高健(コゴン)ソウル市長が「ニューミレニアム新都市計画」を発表し、かつてのゴミ捨て場とその付近には、ワールドカップに向け、サッカースタジアム・デジタルメディアティ・未来型住居団地などの建設とともに、

「人と未来のための環境親和空間」としての公園が作られることになったのである。見学では、はじめにスタジアムに近接するハヌル公園(空の公園、の意)に上った。

ここは、ゴミの第二埋め立て地を土で覆った台形状の山にある公園で、このような土壤に耐性を持つ在来の植物を可能な限り植え、生態観察教育の場としての利用も目指している。山の最上部の平地にはススキの原が広がり、秋には美しい風景として市民に親しまれているという。またもちろん、紅葉の美しさにも定評がある。イベントのための野外ステージなども設けられている。また、風力発電機が複数設置されており、この風力発電によって公園全体で使用する電力をまかなうことを目指している。

「空の公園」から隣の「ノウル公園」(夕焼けの公園、の意)を眺めることができるが、これは「空の公園」とほぼ同じ大きさ・形態のゴミの山(第一埋め立て地)で、現在は市民のゴルフ場となっている。これら二つのかつてのゴミの山は地形が安定しないので、常に観測をしながら環境を整えていく予定で、大きな建造物などはしばらく建設しないことにしているという。



ハヌル公園 階段で頂上へ

また、埋められているゴミ(分別せずに埋めているため具体的に何が埋設されているのか不明、とのこと)から発生するガスを処理し、それを熱源に変換する工場施設などが、二つの公園の間に作られている。

さらに「空の公園」から見下ろすと、漢江に面した地域に広がるいくつもの施設を含む公園を見ることができる。これらは、平和の公園(ワールドカップスタジアム前)・蘭芝川(ナンジチョン)公園・蘭芝漢江(ナンジハンガン)公園等で、これらを全体として「ミレニアム公園」と総称している。特に蘭芝川公園は、ゴミ埋め立てによって汚染された蘭芝川の水を浄化し、その流れの周囲にスポーツ施設や生態観察公園などを整備したものである。見学したのは平日であったが、こうした公園のなかで、中高年齢に見える市民がグループでインラインスケートやマウンテンバイクなどに興じる姿を見ることができた。また、朝早めに「空の公園」を上ったせいか到着した頃には人影は疎らだったが、下りる頃には何人もの市民が長い階段を上ってくるのにすれ違い、市民の利用がかなりあることが感じられた。



ハヌル公園頂上 風力発電機が林立する

ただ、「空の公園」にいる間中、至る所に設置されているスピーカーから陽気なBGMが絶え間なく流れ、鳥の鳴き声(カササギが多かった)などを聞きたい人にとっては邪魔ではないか?という感が否めなかった

案内の姜さんの話では、彼女自身比較的近くに住んでいるが、この場所がこのように親しまれていることはこれまであまり知らなかったという。しかし、彼女の母親が漢江沿いの緑道を徒歩でここまでやってくることを習慣にしている、と教えてくれた。このような設備がこれまでソウルには無かつたため、はじめて「安心して町中ではない道を快く歩く」ことが可能になったのだという話だった。

また、その前に面会した呉・斎藤両教授の話では、こうした環境整備が蘭芝島以外にも最近進められており、ほかに「ソウルの森公園」や汝矣島広場の公園化など、ソウル市内では主として漢江沿岸で複数の事業が行われている。(清渓川も漢江にそそぐ川である。)

4. 延世大学校と延世エコ・フォーラムについて（12月11日、12日）

11日に初めて延世大学を訪問した際に、朴教授から延世エコ・フォーラム(後述)の

メンバーである教員・スタッフの一部を紹介され、面談や説明の機会を得た。また、通訳者の学生・姜さんの案内で、キャンパス内を見学した。

面会した延世大スタッフ等

- 朴 泰潤、Dr. Tae Yoon PARK, 大学院教育学研究科 Associate Professor(準教授)
延世大学出身 環境教育
この訪問の延世大学側主対応者
- Dr. Dong-Chun SHIN, 医学部予防医学・公衆衛生研究
Institute for Environmental Research
の Director
- 金 宇祥 Dr. Woosang Kim, (政治学博士)
政治外交学科教授 東西問題研究院院長
(名刺交換)
- Dr. Jung-Hee SUNG, Research Professor,
Sustainable Development Research
Center
Yonsei RCE Center, Institute of East&West Studies
「エコ・フォーラム」に関する説明者ソウル市の景観政策にも関わっている



延世大でもっとも伝統ある本部の建築

-1. Dr. SHIN との面会内容

延世大学医学部の予防医学研究は韓国で最

も歴史があるといえる。自分はここで大気中の化学合成物による危険等について研究している。日本の大気環境学会やSociety for Risk Analysis Japan (日本リスク管理学会)などにも参加し、日本を訪れる機会は多い。

こうした学会でも、キーワードとして Sustainability の重要度は増している。また、リスク管理学会の成り立ちそのものが文理融合的である。

国内では、韓国のリスク管理 10 年計画を、韓国最大の環境 NPO とともに作成している。

(医学部の学生は S. D. に興味を持っていませんか? と聞いたところ) 残念ながら、現在興味を持つ学生は見つからない。医学部の卒業生でSustainabilityに興味を持ったのは、自分が初めてだと思う。



左から、朴教授、家井、牧、Dr. Shin

-2. Dr. PARK による説明等

延世大学卒業後渡米し、Dr. Eugene Pleasants Odumに師事してEcologyを学んだ。その後複数のアメリカの大学で学び、環境政策を専門とした。昨年まで教育大学に勤務していて環境教育(主として高校生の)を研究してきたが、昨年(2005)母校である延世大に着任した。

延世大学はこれまで研究に重点をおいてい

て、環境教育にはそれほど熱心だったとはいえない大学である。

しかし、6年前に延世大学 ECO フォーラムが前身の「Environmental Research」(1992年に発足)の発展組織として結成され、さらには4年前にS. D. フォーラムも結成された。

現在、研究発表を月1回のペースで行っている。自分は着任後すぐに ECO フォーラムに加わり、E. S. D. をここに位置づけようと、関係者と連携をとりながら活動している。

延世大学は、競合するソウル大や高麗大に比べ学部数も少ないが、E. S. D. における国内のフロンティアを目指したい。

また、欧米で実施されている E. S. D. と、東アジア地域の E. S. D. とは質が異なるものとなるはずである。類似した環境にあり、相互理解が容易な日本の大学と共同研究をしながら、アジアにおけるE. S. D. のスタンダードを構築していきたいと考えている。

(このほかに、朴教授からは、作成途中の教科書の概要等の資料をいただいた。)

-3. Dr. SUNG による「延世エコ・フォーラム」に関する説明

(パワーポイント資料による詳細な説明を受けたが、要点のみ記載)

2001年に、延世大学の研究者 11 人からなる「延世 Eco Research 」というプロジェクトが開始した。この 11 名は、その後 ECO フォーラムにも属し、一部は S. D. フォーラム(こちらはメンバー限定)のメンバーとも重なる。

このプロジェクトで、2002年5月から2003年2月の間に、「新村キャンパスエコ化プロジェクト」と名付けて、調査とそれに基づく提言を行った。説明はその内容の報告で

ある。

「新村キャンパスエコ化プロジェクト」の目的は、延世大学の新村キャンパス環境整備のための政策提言を行うことである。このために、構内の現状を把握し、先行研究や資料を分析した上で、大学の中長期計画策定に際し具体的提言をする。

長い歴史と広い敷地を持つ延世大学は、最近になって急速に建造物が増加中で、それらはキャンパス全体の景観上のバランスや、利用者の便宜などを無視したものであることが多かった。

ソウル郊外に新たに建設したもう一ヵ所のキャンパスでは、最初から「エコ・キャンパス」を目指して作られているのに対して、古い新村ではそれが全く考慮されなかつたのである。

また、新村キャンパスは一つの山を占めているが、その中に含まれる森林の保存に関して、「風致地区に指定されているため手が出せない」といった程度の、消極的態度で処理されている。こうした無秩序なキャンパス経営に対して、統一的なキャンパス景観を形成し、かつ環境に負荷ができるだけかけず、さらにより良い空間設計を目指すための提言を行うことを目的としている。この提言のために、現状について具体的な調査や構成員の意識調査を行い、それをもとに例えば「近接する建物の色のバランスが悪い」などの具体的提言をする。

また、創設当時から残されている建造物の活用に関しても、それを残すだけではなく、新たに建物を建造する場合のモデルとして生かすような提言もある。これらの提言は、キャンパス内の建造物群のデザインに統一感を与え、また長い伝統を活用することに

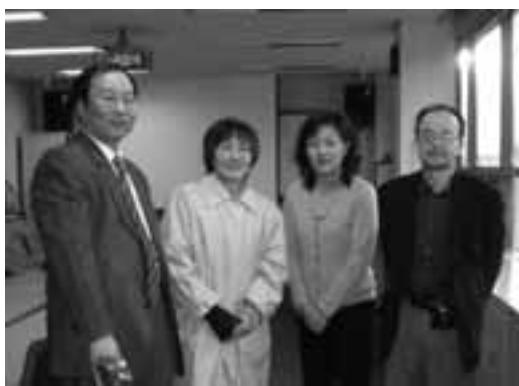
なる。

さらに、キャンパスに残されている自然環境の保護や整備、車道と歩道の分離とともに、歩行者の動線を妨げないような道の設定や、快い歩道の整備などの提言も行っている。あるいは、教室や研究室の断熱性を高めること、個別冷暖房に換えることなどが、省資源の観点から提案されている。

増加する一方の車をどうするかは大問題であるが、できるだけ自動車を使用しないよう、車の乗り入れを禁止し、不便さに耐える姿勢を育成することを実現したいとしている。

このような取り組みによって、学生の省資源・省エネルギーの意識を高めることが教育的効果として目指されている。

つまり、自然に優しい、環境に優しい大学を形成することで、自然的・歴史的・人的資源を活用して、世界のリーダーとしての大学を作ることになるのだ、というものである。



東西問題研究院で、朴教授、家井、牧、Dr. Sung

なお、説明後に Dr. SUNG (延世大出身) は「私が学生だった頃は、もっとたくさんの芝生の広場があり、学生たちはそこで集まるこ

とができたのに、それがほとんど奪われてしまった。」と発言されていた。現在の学生である姜さんも「このごろ急速に空いた場所がなくなってしまい寂しい。」と言っていたので、この数年の間に急速に進行した事態であるらしい。

これは、一つには経営上新建造物が必要であるためであろうが、姜さんの説では「(学生運動で名高い延世大学生の)活動をさせないために、集合場所であった空き地をどんどん減らしている、と学生たちは言っている」とのことであった。事実、延世大の学生の政治的活動は下火であるという。「学生の居場所を無くしてどうするのでしょうか？」とも姜さんは発言していた。

(同様の説は、ソウル市庁前広場に、イルミネーションの設置や冬季だけのスケートリンクが作られ、広場の空間が狭められていたことなどに関して、呉教授から伺った。

「ワールドカップ応援で有名になりましたが、ソウル市民はもうあの広場に集まることができないようになっています。」とのこと。)



ソウル市庁前広場のイルミネーション

